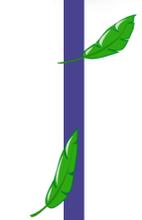


A Story in the Tendai

山火事ニモ負ケズ、土砂崩レニモ負ケズ

京都・月輪寺住職 横田 智照 さん

仏と生きる



Vol.1.3

標高七百五十メートルにある寺は、珍しくない。しかし、車はもちろん、バイクや自転車さえも通る道がないとなれば、どうだろうか。日々の生活は、常人の足で片道一時間半の道のりを、人力徒歩で担ぎ上げなくてはならないとなれば……。寺に電気がついたのは、わずかに二十一年前と聞けば……。このように人里から隔絶された京都愛宕山の山中にある月輪寺（つきのわでら）を護る尼僧住職が、横田智照である。

水を担ぎ山道をゆく

京都嵯峨の大覚寺を過ぎ、車一台がようやく通れる清滝隧道を抜けると、突き当たりが、バスの終点となり、清滝の大駐車場に出る。一般車が通れるのはここまでだ。「一緒に寺まで登りましょう」と横田住職が待っていてくれた。手には、里で買求めた生活物資の入った荷物、背にはリュックである。リュックの中には、マムシに噛まれた時のために止血用のベルトや、木の枝を払うノコギリなどの「七つ道具」が入っているという。勾配のきつい山道を行く。大人の足で平均一時間半の道のりである。若い時はこの道を片道二十分でこなしたという。常人の足で、一時間半から二時間かかる山道で、である。タラタラ歩いていたのでは、生活できないという。それは、走るといよりは、飛ぶが如くである。まるで天狗だ。

◎ 電気は二十一年前に ◎

こうして運んだ水は何より貴重である。冬なら、夜は湯たんぼの湯を、朝は洗面に使い、残りでお茶を湧かす。寺に電気がついたのは、昭和五十八年。それまでは、ランプの生活だった。その年、日本は「おしん」の大ブームだった。一般社会とあまりの落差には呆然とする。京都市右京区嵯峨月輪町というのは、要するに月輪寺だけ。横田とその家族三人しか住んでいないのだから、行政も腰が重かったものか。それにして、京都市内ではないか、と思う。ランプのホヤ掃除も難儀だったが、もう燃料にする白灯油がどこを探しても売っていなかった。郵便も、宅配便も、下の里までしか届かなかった。郵便が、寺まで配達されるようになったのは、ようやく二年前からである。

そんな生活を二十年以上も続けているために、膝の靭帯は、すり減ってしまっている。溜まった水を抜くたびに整形外科医は、手術を強く勧めるが、そんな時間も力もない。寺の主たる財源は「こんな変わった尼を呼んで話を聞こう」という方々からの「

講演料」からである。生活必需品は、清滝の里から担いで運び上げる。最も重要なものは水である。冬は雪で代用しようとしたこともあったが、沸点が違うので、すぐ鍋に穴があいてしまう。水を入れたポリタンクは一缶が二十リットルを両手に振り分けて持つ。重いが、こうしないと体のバランスが取れない。よろよろと細い山道を

で運ぶ物は、三百五十キロが限度である。とはいえず空中千鈞の間にワイヤーを張り、箱に取り付けた滑車を引っかけてただけの簡単な構造だから、雪や風の強い日は使えない。スピードも上がらない。千鈞を上げてくるのに、二十分から三十分。ワイヤーに木が倒れかかると、山にわけ入ってその除去もしてくてはならない。葉っぱを着た尼僧となる。いや、自然を相手のサバイバルライフのようなものだから、なんのこれしきというところか。

寺で使うマキ割も彼女の仕事である。作業衣の上からでも、がっちりとした肩と、鍛え上げられた筋肉がはつきりとわかる。ずいぶん足かげんをしてもらい、ふうふう言いながら一時間も歩いたのだろうか。横田の手になる「月〇寺まで、あと四十分」という看板が木に揺れていた。

その下に「いや、それではキツイ。あと五十分」というハイカーの落書きが書き込まれている。



ようやく2年前から、郵便が寺まで届くようになった。寺にきた郵便配達さんと横田住職。彼は、これ以上は行けないギリギリまでバイクで来て、徒歩で配達に来る。「慣れましたから、40分から50分で登ってきます」。

◎ ネズミとガマ ◎

月輪寺からは、星も、降るように見えるが、雷は、まるで爆弾が落ちるようだ。二年ほど前に、落雷から山火事が発生した。かろうじて、繋がった電話で消防署に連絡する。「車でいけなから、三時間半かかる。住職さん、それまで頑張ってください」というのが、火はみるみるうちに寺に迫った。生木の裂ける音が響き渡る。逃げるが、留まるか、進退窮まったが、仏様を置いて逃げる訳にはいかなかった。死を覚悟して「どうか、火が移りませんように」と、仏様をお願いして、なんとか類焼はまぬがれた。

平成十年に発生した土砂崩れでは、庫裡が半壊した。今も、その危険はついて回る。



生活必需品を担いで山道をゆく。

ネットで一応覆ってはいるが、本格的な土砂崩れが発生すれば、ひとたまりもない。トタンを敷いて、土砂崩れ発生の合図にしている。トタンの上に、石が落ちて、コロコロと音を立てれば、間髪入れずに避難しなくては命がない。「夜は、怖くて眠れませぬ」。夜になれば、真の闇である。風が吹く、雨が降る。人界から隔絶された、標高七百五十メートルの孤寺である。恐怖が、ひしひしと身にしみてくる。そんな時は、外に飛び出して生き物を探すのだという。ガマガエルや、ネズミという小動物と出会うと安心する。理屈などない。ただ、大宇宙の中で、今、この瞬間に命あるものたちと出会え、生命ある喜びを共に確かめ合おうのである。

◎ 収蔵庫の修理 ◎

ようやく、二時間近くかかって月輪寺に着いた。新しい収蔵庫がひととき目を引く。保津川が白く流れているのを眺めることが出来る。絶景である。

この収蔵庫は、智照の父が昭和五十年に作ったものだ。老朽化がひどく、文化庁は、十五年程前から重要文化財の仏像を博物館管理にと迫っていた。しかし、死ぬと

ようやく、二時間近くかかって月輪寺に着いた。新しい収蔵庫がひととき目を引く。保津川が白く流れているのを眺めることが出来る。絶景である。

きは一緒と決めた仏である。この仏様がいらっしゃるから、この孤絶した寺にいられるのだ。それは命を取られるに等しいことだった。と、いつか、収蔵庫修理の自己負担金もなかった、その記事が読売新聞に出ると、心ある人々から百二十件、六百万円の寄付が集まった。千手観音、阿弥陀如来、空也上人像など重要文化財の仏像八体は

◎ 弥陀の体温 ◎

月輪寺は、空也、法然、親鸞が修行したと伝えられる名刹である。時代が過ぎ、戦中に、住む人もなくなり荒廃していった月輪寺に入ったのは、智照の祖母だった。その後、両親が、四日市市に中学生だった彼女と弟を置いて、この寺に入った。大工の棟梁でもあった父は、寺の修理修復に奔走した。今も、共に暮らす母親は、八十歳に近いが、山道をこなす健脚である。

「本当に、命が危ない時に、阿弥陀様に『助けて下さい!』とお願すれば『助けるぞ!』という声を聞きます。その時、弥陀の体温を感じるのです。そういう体験があれば、続けてはいけません。」

里まで送るといふ申し出を固辞して、横田住職と分かれた。途中、何人ものハイカーたちを追い越したから、並よりは速く歩いたと思う。それでも、清滝の里に到着した時は、一時間二十分が過ぎていた。二月半ばの寒さなのに、下着もシャツも汗で濡れ尽くした。空也の瀧と呼ばれる登山口から遙かに仰ぎ見ると、愛宕山の中腹に、月輪寺がすすんで見えた。

「文中敬称略」
文・天台宗出版室編集長 横山 和人

天台宗務庁 総本山延暦寺御用達

お数珠専門の老舗 **小野珠数店**

〒604-8045 京都市中京区寺町通蛸薬師下ル円福寺前町272
電話 075 (221) 2608番
FAX 075 (256) 3288番

消防用設備（工事及び保守点検）設計、施工

株式会社 **しばでん**

T601-8405 京都市南区東九条西岩本町39
電話 075-661-1117
FAX 075-661-4655
休日・夜間 075-931-5516

一隅を照らそう



ハワイ開教奮戦記 (最終回)

多くの人に支えられて



荒了寛 (カッターも筆者)

ハワイ別院の最大の危機は開創十周年頃でした。葬式や祈祷収入だけではどうにもならなくなった頃、ワイキキの

日本語学校を経営しないかと言う話を持ち上がりました。しかし、校舎も古く、引き受けるには校舎の改装費などが

なりの資金が必要でした。迷っている時に、空から鶴が舞い降りてきたかのようになり、そのお名前も鶴さんという日本の実業家夫妻が、まとまったお金をぽんと出して「学校の資金にしてください」と言ってくれたのです。その資金で古い校舎の改装や電気・水道設備を直し、天台宗ハワイ学院日本語学校がスタートしました。



昭和58年、事業団の10周年記念事業として竣工した「一隅会館」天台宗海外開教誌 Tendai Mission Review (天台宗海外伝道事業団発行)より

ルクロードの絵を何枚でも持つてきなさい」という話になり、会長さんが亡くなるまでの間に、二十枚近くの絵を納めさせていたいただきました。これが別院の経営に計り知れないほど大きな力となったことは勿論です。

また、「これぞまさに仏縁」という出会いには、「レプリカ東照宮」との出会いでした。レプリカと言っても大正初期に日本の実業家が名工につくらせたもので、日光の東照宮・輪王寺の社殿仏間二十棟余すべて二十分の一の縮尺模型で「鳴き籠」や、「ねむり猫」などの彫り物まで精密に再現、時価三億とも五億ともいわれる豪華な工芸品でした。ハワイの実業家、ジャック・ウジモリ氏の倉庫に眠っていたのです。

私は一目見て、陽明門だけでも別院に展示させて貰いたいとウジモリ氏に頼んだところ、ウジモリ氏も寺の役に立つならと無償で貸してくれらることにになりました。はじめは羽場大僧正から「寺の行事の邪魔になる」と叱られました。別院に来てくれる人が増えれば、お賽銭も増えるだろうと、私は必死でした。

鬼手仏心

時代

天台宗宗務総長 西郊良光

ずっと「時代は変わる」と聞かされてきた。

しかし、どのように変わるのかは、誰も答えられないという奇妙な状態が続いてきた。その代わりに、良くなる、悪くなるという抽象的、情緒的な言い方がされている。

そもそも、問題の立て方がおかしいのだと思う。まず、どういふ時代、どういふ社会を望むのかという所からスタートしなくてはならない。終戦直後は食糧不足、着ることができなかつた。しかし、今日日本は、物質は充分に行き渡った。

言い古された言葉で恐縮だ

が、物から心へと時代は移っている。いや、正式には移りつつあるところではないか。「カネ」と「モノ」を未だに望みつつ、しかしそれでは満足できない空虚さにあるところか。

私たちの多くが直面する問題を置いて、理想社会や幸せを語っても意味がないように思う。信仰を持つということ、また豊かな老いを生きるということもある。

一般社会からは、僧侶は葬儀の導師というイメージが強いが、安らかな死を迎える、そこに至るまでの役割を担う存在である。それは、どのような時代が訪れても変わらない。

少子高齢化社会が、訪れようとしている。

それから一年ほどして、今度は、佐川急便の佐川清会長さんと、会食することになりました。寺のこと、学校のことなど話しますと、会長さんは「スクールバスを寄贈しよう」と言われました。酒席のことで話したから、二カ月ほどそのままにしていたところ、佐川急便の方から「どんな車があるのか」と問い合わせがあり、フォードのマイクロバスを寄贈して頂きました。

そのお礼のつもりで、会長さんに敦煌の菩薩像を描いた仏画を差し上げますと、「新潟に美術館をつくるので、シ

私たちは待っています



イランで地震、甚大な被害と深刻な状況

昨年12月26日未明、イラン南東部の都市バムを中心にマグニチュード6.5の強い地震がありました。報道によると、死者は4万人を超え、5万人に達する可能性もあるとのこと。この大惨事の中にあつて、震災孤児は6千人以上、電気・水道は止まり、水・食料など生活物資の不足に約10万人の被災者は、寒さの中で悲しみと絶望に沈み、子どもたちの精神も非常に深刻な状況にあります。夜には-8℃にもなると報道され、厳寒の早朝5時半の発生は、9年前の阪神・淡路大震災を想い起こさせ、胸が痛みます。一隅を照らす運動本部では、この甚大な地震災害からの復興を支援するため、緊急募金活動を行うこととなりました。是非ともご協力をお願い申し上げます。皆様からの善意は、日本ユニセフ協会と日本赤十字社等に依託し、支援いたします。

問い合わせ先

〒520-0113 大阪市東淀川区 4-6-2 天台宗務庁内 一隅を照らす運動本部「地球救援募金事務局」 TEL 077-579-0022 FAX 077-579-2516

送金方法：下記の郵便振替口座へ送金下さい。郵便振替：口座番号 01050-1-69505 加入者名：一隅を照らす運動本部 地球救援募金事務局 ※「イラン地震」と明記下さい。締め切り：平成16年3月末日